



2学期後半 心身共に染みる取組に

校長 岡留 祐宏

晩秋から初冬の季節に移り変わる時期になりました。日中の陽射しも弱まり、日暮れも早くなりました。鹿児島では、鮮やかな紅葉よりも、銀杏の黄葉に秋の深まりを感じる頃です。

2学期前半は、運動会や陸上記録会、町民体育祭、相撲大会の練習に励むうちに、あっという間に過ぎたように感じました。今また、今月中旬に予定されている町駅伝大会に向けて選手の皆さんが夕方から連日走り込みを続けています。学校では、11日の町音楽祭、14日の学習発表会に向けて最終の練習・準備に取り組んでいるところです。まさに、スポーツの秋、芸術の秋とボリューム満点の2学期です。

さて、秋の深まりとともに、2学期後半は落ち着いた雰囲気の中で、学習やその他の活動に取り組みたい時期でもあります。子どもたちにも、2学期の目標を再度確認し、後半の過ごし方を考えてほしいと話しました。各行事を通して学んだ集中力、ねばり強さ、工夫を生活面、学習面、読書活動でも生かしてほしいと思います。



2年生算数の研究授業
複式に備えてガイド学習導入

さかあがり 見てくれていた…

川辺町の俳人福永耕二氏の業績をしのいで、平成11年に始まった“かわなべ青の俳句”。例年、11月下旬に入賞作品が発表されます。第1回福永賞(最優秀賞)は、水泳の元オリンピック選手の宮下純一さんが高校1年のときに作った「声援がしぶきにぬれて泳ぎ切る」という句です。懸命に泳ぐ様子や気持ちが臨場感豊かに表現されているなあと思います。

歴代の作品の中で私がとても印象深い句は、平成19年第9回福永賞を受賞した当時小学2年生の野口青葉さんの作品です。⇒ 「さかあがり 見てくれていた ○○○○○」

当時、この○○○○○に入る言葉をいくつかの学級で子どもたちに想像させたことがあります。「おかあさんでしょ?」とか、「お姉ちゃん?」「お兄ちゃん?」「一緒に散歩している犬かも」などの反応。「おとうさん」って答えはなかなか出てきません。

で、正解は「あきのそら」なのです。何度も挑戦してある日とうとうできたのでしょう。その喜びが爽やかな秋空と重なってとても印象に残りました。「うれしい」という言葉を使わなくても、見事に達成感が表現できていて、すばらしいなあと感じました。

ところで、このとき答を考えていたある子どもが、「この子、きっと夏の頃からずっと練習してたんだよ」とつぶやいたんです。「あきのそら」から、練習に励んできた様子を豊かに感じ取れるその感性にも感激しました。「だよね」と思わず手をたたきました。

夏を越えて頑張ってきたことが実を結ぶ“実りの秋”が、どの子どもにも訪れますよう!

必要は知恵の母です

先日、黒木重一区長さんが、「子どもたちにどうぞ」と、角バナナを持ってきてくださいました。鈴なりに実った40本ほどの黄色く色付いたバナナです。仕掛け好きな本校の2人の職員(だれ?)が、そのバナナの房を廊下の天井に吊り下げました。低学年の子どもたちにはちょっと手が届かない高さです。翌朝、登校してきた子どもたちはすぐにバナナに気づき、手を伸ばしました。低学年の子どもたちはジャンプしても届きません。2人が馬になり、もう一人がその上に乗っても届かない。そのうち、学習発表会で使う小道具の棒でバナナをつつき始めました。やっぱり、必要(欲求)は発明・創意工夫の母です。人類の知恵の獲得を垣間見た感じがす(大袈裟かな)。給食時間にみんなでいただきました。区長さん、ありがとうございます!!

